た扱いの学名が図鑑等に用いられることがあるが，それは一寸も差し支えないことである．もっとも，使用者の便を考えるなら，‘自分’の使う学名が「目録」のどれに当るかを示しておく方が親切なのはいうまでもないことである．一般に提供する著述に，使用者の便を配慮するのは当然のサービスだからである．単に，標準化，安定化ということも，そのような協力態勢が組まれなければ成功しないことであり，罰則のない国際植物命名規約が重要な役割を果してきたのも，世界中の植物学者の協力があったからこそである．

もっとも，上記の議論をきっかけとして，規約そのものも大幅な改訂をはかるべきであるという考えがある．その1つとして，新種の記載にラテン語を必要とする条項を，ラテン語と英語のどちらでもよい，と改めるべきではないかとする考えがある．かってラテン語が果した役割を今では英語が果しており，英語では駄目という意見がヨーロッパの非英語国を含めて，徐々に説得力をもたなくなってきているのも事実である．植物名は分類学者だけのためのものでないことに目を向け，生物学のための学名の安定という視点で論議されることを期待したい．

参考文献

Hawksworth D. L. and Greuter W. 1989. Report of the first meeting of a working group on lists of names in current use. Taxon **38**: 142－148.

Anonymous 1990. Draft lists and generic names in current use: A call for cooperation and comments. Taxon **39**: 705.

岩槻邦男 1991 国際シンポジウム「植物名確定の手続きの改善」．日本植物分類学会ニュース**63**: 8－11

（本報文の初校の段階で，仮リストのうち，菌類，蘚苔類，種子植物の分が届いている．それぞれ専門の研究者の協力を依頼する予定であるが，植物分類学会総会などの機会に，リストをチェックして，間違いを指摘してほしい．）

（岩槻邦男　Kunio Iwatsuki）

□Chadwick D. J. and Marsh J. (ed.): **Bioactive compounds from plants** (Ciba Foundation Symposium 154) 242pp. 1990. John Wiley & Sons, New York. 本書は1990年2月20－22日タイ国バンコックで開催されたPrincess Chulaborn研究所とCiba財団共催の植物基原生物活性物質シンポジウムの講演集である．A. R. Buttersby教授が主宰し，タイ国Chulaborn王女および各国からの14名の講演者を含むこのシンポジウムの最初のテーマは民俗薬理学，民俗植物学で伝統医学や民間薬に現れた植物とその薬効について集積された情報で，医薬農薬の開発に対する重要性を印象づけている．第2のテーマは天然活性物質をモデルとするより生物活性の強い化合物の合成である．また天然には極微量しか得られない活性物質は大量合成によって始めて薬理試験を行うことが可能になることが示されている．第3のテーマは組織・細胞培養に関するもので，これは生理的に重要な物質や酵素の生産に利用できる．また一方生合成研究の手段としても重要である．第4のテーマは有機化学者にとって魅力的な天然物の複雑な化学構造や立体構造が対象となっている．最後のテーマは分子生物学的なアプローチについてで植物への遺伝子の導入によって将来蛋白やペプチドの合成に止らず他の第2次代謝産物の生産への道を開こうとする新しい試みが示唆されている．これらの多くの興味ある報告にはそれぞれ質疑応答が続いて記録されていて，これがこのシンポジウムの実質を高め読者に最も興味をそそる内容を提供している．（柴田承二）

□謝　宗万：**中薬材品種論述上冊**，第二版543 pp. 1990. 上海科学技術出版社，上海．17.9元．本書は中国の市場調査および各種文献をもとに生薬の基原植物，形状，分布，薬効などを述べ，異物同名，同物異名の混乱状況を明らかにし，正条品，偽品，代用品などについて論じたものである．構成は中国市場に出回っている生薬のうち，基本生薬およびその類似生薬を1項目とし，全体では60項目となっている．例えば第一項目には人参，

西洋参，参叶，土人参が記載されており，来歴，分布，品種，加工調製，薬理，薬効，類似品，偽品などについて述べている．本書の特徴は，本草文献および市場調査に基づく正条品，類似品，偽品の整理および考察にある．著者は中薬研究分野における重鎮で，特に本草関係では第一人者であり，まさに著者ならではの大作といえよう．

1964年に上冊の第一版が出版され，1984年中冊が出版されたが，諸般の状況の変化やその後研究の進展に伴い，下冊より先に上冊の改定が必要であるとのことから，本書を先に執筆され，ようやく出版にこぎつけたとのことである．第一版と比較すると項目数は100から60に減少しているが，書籍サイズはA5からB5へとひとまわり大きくなり，また頁数も増えており，各項目はかなり充実した内容となっている．

本書のように個々の生薬を基原的立場から詳細に論じた本はほとんど見当たらず，中国の生薬を研究する上で貴重な文献である．生薬に携わる教育者，研究者，業界関係者にとっては是非とも揃えておきたい一冊である．

(株)ツムラ，生物・化学研究所，布目慎勇)

□Lindstrom S. C. and Gabrielson P. W. (ed.)：**Thirteenth International Seaweed Symposium.** Developement in hydrobiology 58. i－xxxviii＋678pp. 1990. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht. ¥54,000. 1989年8月にカナダ・ヴァンクーヴァーで開かれた第13回国際海藻会議の講演集で，招待講演，ミニシンポジウム，一般講演とポスターの3部から成る．第1部の招待講演では「国際海藻会議の過去と現在」と題してブリティシュコロンビア大学のR. F. Scagel教授が1952年の第1回より現在に至るまでの経緯をエピソードを交えて述べ，続いてアメリカのマリンコロイドの専門家D. W. Renn博士が「海藻とマリンバイオテクノロジー」と題して海藻の多糖を中心とする生物工学的手法について述べている．第2部のミニシンポジウムでは，1)海藻群集と収穫の関係（5編），2)海藻の形状と生産力の関係（4編），3)北米における海藻養殖の進展（3編），4)有用海藻の分類学（4編），5)海藻のプロトプラストの培養と組織培養及びその海藻産業への利用（4編）の5つのトピックスに計20編の論文が掲載される．第3部の一般講演とポスターは，1)分類（3編），2)生態（14編），3)資源（9編），4)養殖・組織培養・育種（17編），5)生理（7編），6)海藻の化学組成（15編），7)海藻の化学物質の構造，8)分子生物学（1編）の8項目から成り，74編が掲載される．国際海藻会議は海藻の利用の研究を進展させる目的で1952年に第1回会議がスコットランドで開かれて以来3年毎の開催で，今回第13回を迎えた．1982年に純理学的な国際藻類学会議が発足したこともあって，この海藻会議は最近特におう応用的色彩の濃い研究会議となっている．（千原光雄）

□内藤　喬：**鹿児島民俗植物記（復刻版）** 389pp. 1991．青潮社（〒862　熊本市大江5丁目11－5）¥18,000（税込）．本書の資料は元鹿児島大学教授の内藤　喬氏が30年間にわたって集めたもので，質，量ともに類を見ない貴重なものである．本書の内容は鹿児島県が中心であるが，沖縄県，四国，本州（近畿，中国），福井県にも亘っている．本書の初版は昭和39年であるが，出版後直に売り切れ，多くの人から再版が望まれていたが，今回復刻版が出たことは喜びにたえない．（初島佳彦）

□曲泽洲（主編）：**北京果树志** 721 pp. 北京出版社，北京．35元．文字通り北京で栽培される果樹を網羅し，それを解説したものである．夏の日差しが強く，かつ乾燥する（6－8月の降水量は一部を除き500 mm以下である）北京は果樹栽培に適しており，温帯性果樹が多数栽培される．本書は巻頭に25ページにわたり約150栽培品種の原色図が載せられている．各種について栽培品種レベルまで線画を付して詳述しており，革命後にソ連やその他諸外国から導入されたおびただしい栽培品種，中国で改良された栽培品種，リンゴの富士のようなこの地における将来性など，園芸学・植物学に加え，園芸史・農業経済の面からも興味深い内容が盛られているように思われる．残念に思うのは配列が植物分類体系とは合致していないことで，外国人には参照に多少の困難を伴うことである．（大場秀章）